
僕と翔子はFクラス

駄文炸裂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と翔子はFクラス

【Nコード】

N4337Z

【作者名】

駄文炸裂

【あらすじ】

『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。「明久の相手は姫路や美波ではない」「明久が頭いい」「ラグナの嫁は姫様」という設定に嫌悪感を感じる方はおもしろくください。初投稿、駄文ですがよろしく願います。

僕と翔子はFクラス(前書き)

反省はしている。後悔もしている。

僕と翔子はFクラス

僕らがこの文月学園に入学してから、二度目の春が訪れた。校舎へと続く道の両脇には、美しい桜が咲き誇り、僕たちを迎え入れてくれる。

昨年の今頃の記憶は正直いってほとんど無い。おそらく周りに気を配る余裕がなかったんだと思う。さすがに今年は、そういうのは無縁ではあるが。

（まあ、試験の結果が分からなければ、少しくらいはドキドキしたのかもなあ。）

そんなことを考えながら僕……吉井明久は自分の通う学園へと足を進めていた。

……隣を歩く最愛の人の手を握りながら。

「おはよう。おお、お前らか」

文月学園に到着した僕らは、玄関の前にいる人物に声をかけられた。浅黒い肌に角刈りの頭、そして鍛え上げられた筋肉……。

このような特徴を兼ね備えた人物を僕は一人しか知らない。一人だけで十分だけど。

「鉄人、おはようございます」

「……おはようございます」

ペコつと頭を下げての挨拶。しかし、目の前の人物は僕らの態度に不満を持ったらしく、顔をしかめていた。

「吉井、いつも言っているがそのあだ名は止めてもらいたいのが……」

なるほど、名前で呼んでほしかったのか。ならもつと早く言うてくれれば良かったのに。

よし、ならTake2。

「おはようございます、28号先生」

「すまん、もう鉄人でいい」

あれ、速攻で否定されたよ。名前で呼んだのに。まあ、本人がいいならそれでいいけど。

「はあ……」

「鉄人、ため息をつくとき幸せが逃げていきますよ?」「誰のせいだと思っっている……まあいい。ほら、お前らの分だ」

そついいながら鉄人は足元の箱から封筒を2つ取り出し、僕に渡し

た。

「ありがとうございます。でも、なんでこんな原始的な方法で配っているんですか？学園の掲示板にでもはった方が早そうですね。鉄人も楽できるでしょうに……」
「そうしたいのは山々だが、これがこの学園の方針でな……」

しみじみとつぶやく様子を見る限り、彼も苦勞しているようだ。そう思いながら、渡された封筒2つを見る。名前欄に書かれてある文字。片方は僕の名前の『吉井明久』。

そして、もう片方は……

「じゃあ……」

はい、こっちが翔子の」

「……ありがとうございます、明久」

『霧島翔子』……そう書かれた封筒を受け取った彼女は美しい微笑みと共にお礼を言った。艶のある長い黒髪に日本人形の様な繊細な顔立ち。そんな彼女の笑顔に僕も笑顔になってしまう……。。

「…っと、先に封筒見ておこうよ」

言った瞬間、翔子が不機嫌な表情になってしまった。苦笑しながら、翔子の頭を撫でる。

「一応クラスとかいろいろなこと確認しなきゃいけないし、ね？」

「……分かった」

撫でられて少し機嫌を直したのか翔子は封筒を丁寧に開けていく。

僕も丁寧に……とはいかず、先端をビリビリと破いて折り畳まれていた紙を取り出した。広げてみると4文字がその紙の大半を占領している。翔子のにも同じ4文字が書かれていた。

『Fクラス』

(ま、そうなるよな)

予想していたことなので特に思うことも無く封筒を閉まった。

「しかし、惜しいな。半年前ならともかく今のお前なら振り分け試験を受けていれば…」

「鉄人」

僕は強い口調で鉄人の言葉を遮った。

「そんなものより、翔子の方がずっと大事です」
「……そうか。なら俺は何も言わん」

そついう鉄人は呆れ顔だったが、少し笑っていた。

「じゃあ、そろそろ行こう翔……子？」

振り返って見ると何故か顔を赤らめた、いや、真っ赤にした彼女の姿。……指をモジモジさせているとことかすごく可愛いんだけど。

「……明久、大好き／＼／＼」

翔子はそのまま腕を組んでぴったりとくっついてきた。

「えっと、急にどうしたの？」

「……何となく」

いや、何となくって……いいか、幸せだし。

「……行こう、翔子」

「……うん」

2年生の春が始まる。少しの不安と大きな期待。僕らはしっかりと足取りで校舎へと入っていった。

僕と翔子はFクラス（後書き）

3月になるまで不定期更新。……幸先悪くてすみません。

AクラスとFクラス（前書き）

評価、お気に入り登録していただいた方並びに拝読していただいた方、ありがとうございます。

さて、第2話です。今回からバカテストをちよくちよくいれていきます。バカテストの問題は『バカとテストと召喚獣』シリーズ、『爆笑！学力テストおバカ解答！』、『爆笑！テストの珍解答』シリーズを参考にしていきます。この場を借りてお礼申し上げます。

……早くラグナ出したい…………。

AクラスとFクラス

問題

『大和時代や飛鳥時代に中国・朝鮮半島から日本に渡り、新しい技術などを導入した人物の総称を答えなさい。』

吉井明久の答え

『渡来人』

教師のコメント
正解です。

島田美波の答え

『外国人』

教師のコメント
アバウトすぎます。

土屋康太の答え

『飛来人』

教師のコメント
日本列島に鳥人来襲。

「翔子、僕らの目の前に広がる馬鹿デカイ部屋ってなに？」

「…… Aクラス、だと思っ」

初めて上がった校舎3階。目を引いたのは、『教室』の定義を木っ端微塵に打ち砕きかねない教室・・・Aクラスだった。

「初めまして。皆さん進級おめでとございます。私はこの2年A組の担任、高橋洋子です。」

少し気になったので覗いてみると、知的な雰囲気を持つ女性教師がよく通る声で話をしていた。

「まずはじめに設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、リクライニングシート。参考書、教科書はもとより冷蔵庫の中心に關しても全て学園が支給します。他に不備のある人はいますか？」

なんだろう、あほみたいに豪華な内容が聞こえてきたよ。パソコン

は一家に一台ならぬ、1人に一台。黒板はプラズマディスプレイ式になっており、天井は総ガラス製である。怖くて値段が聞けない。

「他にも何か必要なものがあれば遠慮なく何でも申し上げて下さい。教師一同で出来る限りの対処をします。」

「……以上の説明から辿り着いた結論。」

「色々な意味で、このクラスの設備は間違っている……」

「……私もそう思った」

贅の極みを見た感じがする。過度に広い教室に過剰な設備、正直不備を見つけることが難しい。高級ホテルも真つ青だろう。

「……はあ。噂は聞いていたけど、これほどとは……」

思わず、溜め息がもれてしまった。

ここ、文月学園では1年生の終わりに振り分け試験というものを受け、その時の順位でクラスが決まる。一学年300人を50人ずつに分けて成績のよい順からAクラス、Bクラス、Cクラス……という具合に。さっきのAクラスの生徒たちはその試験の上位50人で

構成された超精鋭部隊ともいうことができるだろう。

そしてここからが文月学園の特徴なのだか、クラスが下がっていくごとにクラス設備も下がっていく。まあこれは納得できる。全ての組がAクラス並の設備だったら維持費だけでもとんでもないことになる。

そもそも、このクラス格差が学園の試みらしい。学園長の・・・えつと、名前は忘れたけどその人が

「学力低下だとかいって嘆いている奴らがいるけど、ここ最近の教育が甘過ぎるんだよ。」

とあって、自分の成績が、つまり勉強へどれだけ努力したかが学校生活の外面的な快適さを決める振り分け試験を採用したと言っていた。

少し話を戻すが、設備はクラスが下がるほど、自分の成績が低いほど貧乏(?)になっていく。Cクラスになるとエアコンが扇風機になり(個人ではなく全体)、Dクラスは辛うじてストーブがあるという、普通の高校よりも貧しい教室仕様になっている。Dクラスでこのレベルである。

何がしたいのかと言つと……

AクラスとFクラス（後書き）

少なくともすみません？次回投稿は・・・早ければ年末あたりに。

さようなら福原先生（死んでいません）（前書き）

文才がほしいと思う今日この頃です。

作者はラグナ×レイチエル激押しですが、ラグナ×ニユーも好きです。

キャラ単体ではハザマー択です。

さようなら福原先生（死んでいません）

問題

『明治時代の作曲家で、「荒城の月」を作曲した人物を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『滝廉太郎』

教師のコメント

正解です

坂本雄二の答え

『バッハ』

教師のコメント

日本にもっと誇りを持って下さい

土屋康太の答え

『俺廉太郎』

教師のコメント

随分と大きくできましたね。

『トンネルを抜けるとそこは雪国だった』

一昔前の大作家が書いた小説の言葉である。

『扉を開けるとそこは地獄だった』

たった今、僕、吉井明久の心に浮かんだ感情である。

「翔子、そろそろ入ろう。これ以上待っているとHR始まりそうだし……」
「……うん」

翔子の言葉を聞きながら、腕時計をちらつと見た。8時30分。軽い遅刻である。Aクラスに寄ったのがまずかった。新学期早々遅れて来て、皆に悪い印象を持たれたりしないだろうか？……考え過ぎか。

『ガシャ！！……ザクザクザクツ！！』

「……………」
「……………」

扉を閉める（反射神経使用）と同時にいい音が40近く聞こえてきた。……よし、とりあえず翔子に聞いてみよう。

「翔子、今の何？」

「……………歓迎？」

新クラスメイトを流血沙汰付きで歓迎はさすがにないと思う。いや、ないと思いたい。

「いや、落ち着け僕。もう一度今の事を整理しよう」

そくだ落ち着け。教室に入った瞬間クラスメイトにカッターを投げられるはずないじゃないか。どこのホラー小説だよ。

……そうか、今は幻だ。僕の中にある、遅刻に対する不安から生まれた幻覚なんだ！罵倒とカッターが同時に飛んでくるなんてあるわけない！

「よし、心を落ち着けてTake2！」

「あつ、明久……………」

深呼吸を一回してさっきの悪夢を振り払った。こんどこそ、本当のクラスメイトに笑顔で……………

『ガラッ』

「おはようござ」『死ねリア充ううううう!!!』 『ガシャッ!』

『ドガッ!!!!』

「……………翔子、僕、何か悪いことしたかな？」

「……………してない」

「じゃあ何で入って早々皆が僕にカッターとか卓袱台とか投げてるのかな？」 「……………分からない」

もしかして、これが遅刻者への制裁なのか。去年はそんな罰はなかったはずだが。というより、本気で帰りたい。まだ最初の一步すら踏み出せていないのだ。

そんな事を考えていたら……………

「すみません、通してもらえますかね？」

「はい？」

いきなり後ろから聞こえた声。振り返ってみると、よれよれのシャツを着たオジサンが立っていた。

「……………えーっと、あなたは？」

「ああ、私は福原です。Fクラスの、担任です」

なんだか間延びした覇気のない声だったが、少し親近感を持てるような声だった。この人が僕の担任か。

「吉井明久です。よろしくお願いします」

姿だった。

さようなら福原先生（死んでいません）（後書き）

次回は自己紹介編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4337z/>

僕と翔子はFクラス

2011年12月25日01時50分発行